

談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア

東郷雄二

0. はじめに

日本語の指示詞コソアについては、佐久間 (1936) がコを一人称領域、ソを二人称領域、アを三人称領域と、人称の概念と相関させて説明し、三上 (1970) はコ・ソ・アは三者が対立するのではなく、話し手と聞き手が視点を共有するコ・アと、視点に対立するソ・コの **double binary** な対立であると説明してきた。これらの研究は重要な知見をもたらしたが、いずれも指示詞の現場指示的用法を中心に説明を目指したものであった。これに反して、文脈指示的用法については、未だに未解決の問題が多く定説が定まらない。本稿では、文脈指示的用法を中心に、指示詞の機能を考察する。

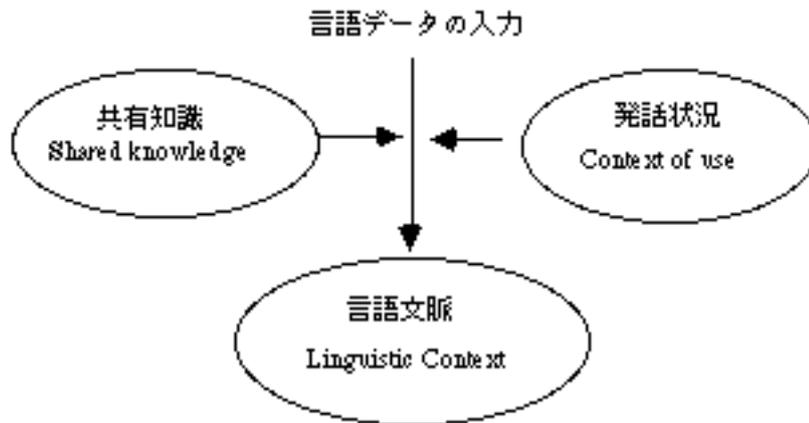
指示詞の用法として、三上 (1970) は「直接指示」**deictic** と「文脈承前」**anaphoric** を、久野 (1973) は「眼前指示」**demonstrative** と「文脈指示」**anaphoric** を、黒田 (1979) は「英文法において流布の」と断って「独立的用法」と「照応的用法」を区別している。名称こそ違え、同じものを指していると判断してさしつかえない。このような二分法に対して、本稿では指示詞の用法を、a) 現場指示、b) 文脈指示、c) 共有知識指示と、3 種類に区別し、さらに複数の領域にまたがる指示があることを明らかにする。そして、従来文脈指示とされてきた指示詞の用法には、c) の共有知識指示と見なすべきものがあること、このためにしばしばその存在が疑われる「共有知識」という概念は必要であることを主張する。

1. 談話モデル

指示詞の分析のために、本稿では談話モデルという理論的仮構を設定する(注1)。まず最初に談話 **discourse** を次のように定義する。

「談話とは、話し手と聞き手の間の相互行為により、時系列に沿って、局所的に構築される、心的表象 **mental representation** である」

談話モデル **discourse model** (注2) とは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的領域をさす。談話モデルには、導入された指示対象が登録され探索される領域として、「共有知識領域」「発話状況領域」「言語文脈領域」の三つがある。



話し手は自分の側の談話モデル (これを DM-S とする)を持ち、聞き手も自分の側に談話モデル (これを DM-H とする)を持つ。言語によるコミュニケーションは、DM-S と DM-H の調整過程と見なすことができる。

共有知識領域は、世界についての一般的知識を格納する「百科事典的知識」と、個人的体験についての知識を格納する「エピソード記憶」からなる (注3)。前者には本稿執筆の時点での日本の総理大臣は小渕恵三であるといった知識が、後者には例えば話し手が去年行った沖縄旅行の記憶などが存在する。「百科事典的知識」は発話の初期値として与えられていて、DM-S と DM-H で一致していると想定される。「エピソード記憶」のうち、話し手と聞き手の共有する体験に関する知識 (例えばふたりで行った沖縄旅行の思い出) は、やはり発話の初期値であり両者で一致している。ただし、「エピソード記憶」には、話し手だけが持ち、聞き手が共有しない知識も含まれている。この意味で全体をカバーする「共有知識」という名称は適切を欠くおそれがあるが、本稿ではあえてこの名称を用いる (注4)。

発話状況領域は、話し手と聞き手を含む発話の現場と、その場に存在するものについての心的表象である (注5)。この領域もまた発話の初期値であり、話し手と聞き手の共有するものである。

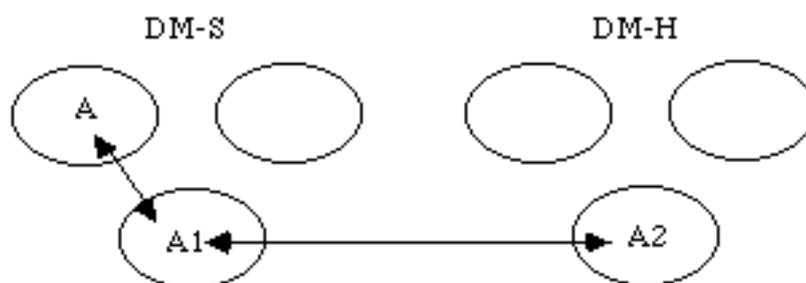
言語文脈領域だけが、談話の開始時点でその値がゼロである。この領域には、談話の進行に従って、話題に出た指示対象と、それに関する情報が登録される。その過程を少し詳しく検討しよう。

例えば次の発話により、話し手は指示表現「進々堂という喫茶店」によって、自分の談話モデル DM-S に談話の指示対象 *discourse referent* を導入する。

- (1) 大学の北門を出た所に進々堂という喫茶店がありますから、そこで待っていてください。

DM-S に導入された指示対象 (A1) は、すぐさま DM-H にその対応物 (A2)を形成する。このふたつはその同一性を保証するリンクで結合されている(注6)。話し手はもともと

進々堂という喫茶店を知っているのです、それは DM-S 内の共有知識領域のなかのエピソード記憶領域にも対応物 (A) を持っている。このように、共有知識領域内の指示対象と、言語文脈領域内に設定された指示対象を結合するリンクを、知識リンクと呼ぼう。一方、聞き手はこの時点ではその喫茶店を知らないのです、DM-H 内の共有知識領域には、その対応物を持っていない。つまり、喫茶店については、話し手から聞いたばかりのことしか知らない状態である。このとき、聞き手にとっての A2 は、概略「大学の北門を出た所にある進々堂という喫茶店」という記述に留まる。この状態は次のように図示することができる。



話し手はさらに談話を続行し、「そこで待っていてください」のように、指示詞「そこ」を用いて A1 をさすことができる。この「そこ」は文脈指示である。つまり、談話モデルによる文脈指示の定義とは、「話し手が DM-S 内の言語文脈領域に導入し、DM-H にも対応物が形成された指示対象をさす」というものである (注 7)。

いったん上図の状態になれば、聞き手もソを用いて同じ指示対象をさすことができる。

(2) {そこは / その喫茶店は} 何時まであいていますか。

ここで注意しなくてはならないのは、聞き手の発話(2) のソは、上図の A でも A1 でもなく、A2 をさしているという点である。

2. 談話モデルの領域と指示表現の関係

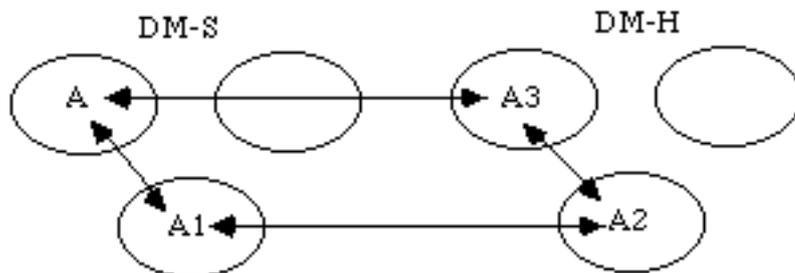
では次に談話モデルを構成している 3 つの領域と、指示表現の対応関係を見てみよう。共有知識領域には、世界についての百科事典的知識、個人的体験に関するエピソード記憶が格納されている。談話の初期値として与えられたこれらの情報については、固有名などを用いて直接に指示することができる。

(3) a. コロンブスは 1492 年にアメリカ大陸を発見した。[百科事典的知識]

b. 昨日大学の図書館で古畑さんを見かけましたよ。[エピソード記憶]

またこの領域に登録されている指示対象は、ア系指示詞を用いてさすことができる。この状態を下図で示す。

(4) ほら、先週食事をしたイタリア料理店、あの店はおいしかったですね。



上の図で、A は話し手が記憶しているイタリア料理店、A1 は話し手が言語文脈領域に導入した「先週食事をしたイタリア料理店」という指示表現のさすもので、DM-S 内ではこのふたつは知識リンクで結ばれている。A2 は話し手が導入した「先週食事をしたイタリア料理店」によって、DM-H に設定されたその対応物、A3 は聞き手が記憶しているイタリア料理店で、この両者も知識リンクで結ばれている。またここで重要なのは、A と A3 も同一性を保証するリンクで結合されているという点である。このリンクが「私もあなたも記憶しているイタリア料理店」であること、換言すれば共有知識であることを保証している。

ア系指示詞を用いることができる条件は、基本的に上図のような談話モデルの状態を満たしているときである。これは久野 (1973) の、ア系列の指示詞は「その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」という仮説を談話モデルを用いて表現したものである。ただし、これには重要な反例があり、それについては後に論じる。

またここでは次の仮説を提唱する。

「ア系指示詞は、共有知識領域に存在する対象をさす。また共有知識領域に存在する対象をさすことができるのは、ア系に限られる」

この仮説の意味するところは、先行研究で論じられることのある、「文脈指示のア」の用法の存在を否定するというものである(注8)。

次に言語文脈領域であるが、ここには談話で言及された指示対象が登録される。すでに例(1)であげた「進々堂という喫茶店」がこれである。この領域に導入された (そして DM-H で共有知識領域とリンクされていない) 指示対象は、アでさすことはできず、ソのみが用いられる。

(5) A : 先週「海の上のピアニスト」という映画を見たのだけれど、おもしろかったですよ。

B : {それは /*あれは} どんな映画ですか。

金水・田窪 (1990)が指摘したように、文脈指示でコが使われる例がある。

(6) 私には、酒好という変わった名前の友人がいる。この人は、名前とは逆に、一滴も酒が飲めない。

次のいわゆる後方照応も、文脈指示のコの例である。

(7) このことは秘密にしておいてほしいのですが、実は私は父の子ではないのです。

本稿では、このコの用法は一種の現場指示であるという金水・田窪 (1990)の分析を支持し、これ以上立ち入らない。

最後に発話状況領域であるが、この領域を代表する指示表現は、「私」「君」などの *indexical* と、指さし行為を伴った現場指示的用法の「これ」「それ」などの *demonstrative* な指示詞である。現場指示では、コ・ソ・アのすべての系列の指示詞を用いることができる。

談話モデルを構成するそれぞれの領域をさす指示詞は次のようになる。

(i) 共有知識領域：ア

(ii) 言語文脈領域：ソ、コ

(iii) 発話状況領域：コ、ソ、ア

(i) (ii) (iii) と下に行くにつれて、指示詞の種類が増加することが見てとれる。これはなぜだろうか。それは「指示領域の分割」という操作に関係している。

発話状況領域は、佐久間の明らかにしたように、一人称領域・二人称領域・三人称領域と、指示対象が帰属する領域に応じて、指示領域を分割することができる。また、店で物を買うときに、指さしながら「これとこれとこれください」という場合のように、発話者の一回一回の指示行為によって、さらに領域を細かく分割することも可能である。

一方、言語文脈領域では、人称領域のような下位区分が設定されておらず、話し手と聞き手は、原則として同じ言語文脈領域を共有する。これはすべてソでさされる領域である。唯一可能な指示領域の分割は、発話時点を境界とする前方照応か後方照応かという話線の時間軸による分割と、話し手が情報提示の方略 (注9) として行なう分割である。この点において、文脈指示のソとコが対立する。

最後に共有知識領域は話し手の裁量によって分割することができず、すべてアでさされる。先に共有知識領域は、百科事典的知識領域とエピソード記憶に下位区分されると述べたが、それは登録された知識の性質にちがいに由来するものであり、指示の方略においては、すべて「共有知識」として一括され、アでさされるのである。誤解を招くおそれがあるにもかかわらず、本稿では「共有知識」という呼び名を採用した所以である。このように、指示領域によって、用いられる指示詞の種類も数も異なるのは決して偶然ではなく、それぞれの指示領域の本質的相違と相関するのである。

3. 複数の領域にまたがる指示

ここでいったん日本語のコソアを離れて、談話モデルを構成する領域と指示の関係について考察する。談話モデルを構成する領域を代表する指示表現は次のようなものである。

- (8) a. 共有知識領域：固有名 proper names
Columbus discovered America in 1492.
- b. 発話状況領域：指示詞 demonstratives、指標詞 indexicals
I'll take this.
- c. 言語文脈領域：代名詞 pronouns
Augustus is a friend of mine. He is fond of fishing.

固有名は共有知識のなかの百科事典的知識またはエピソード記憶を参照することで、その指示が決定される。*this / that* などの指示詞や、*I, you* などの指標詞は、発話状況を参照し、ときには指さし行為などの補助的指示行為を伴って、その指示が確定される。*he / she* などの人称代名詞は、言語文脈に導入された先行詞との同一指示によってそのさすものが理解される (注 10)。これらの指示表現は、話し手の側から見ればその指示行為を成立させ、聞き手の側から見ればその指示表現を理解するために、どの領域に帰属する情報を利用するのかという点で、上のように分類できる。

しかし、指示表現のなかにはその指示の確定に必要な情報が複数の領域にまたがるものがある。Clark & Marshall (1981) は確定記述の指示の理解に必要な共有知識として、a) Community membership, b) Physical copresence, c) Linguistic copresence の3種類をあげている。a)は本稿でいう共有知識領域、b) は発話状況領域、c)は言語文脈領域に相当する。Clark & Marshall はこれに加えて、彼らが *mixtures* と呼ぶ混合的知識の存在を指摘している。

- (9) I bought a candle yesterday, but *the wick* had broken off.

これは連想照応として知られている現象で、*the wick* の理解には、トリガーとなる *a candle* の存在と、"A candle has a wick." という知識が必要である。つまり Clark & Marshall の用語を使うと、これは Community membership と Linguistic Copresence の両方の知識をブレンドした結果ということになる (注 11)。本稿の用語に直せば、連想照応は言語文脈領域と共有知識領域の両方にまたがるハイブリッド型の指示である。

現在までにその存在が指摘されているハイブリッド型の指示は、上記の連想照応だけであるが、本稿では新たにもう2つのタイプのハイブリッド型指示を提案する。

Prince (1978) は談話における存在前提の役割を論じ、次のふたつの対話の自然度には差があることを指摘している。

- (10) A : My car's really a mess. I just found out that there is a leak in the master break cylinder.
B 1: Oh, I had exactly the same thing happen to my car last year.

B 2 : ??Oh, I had exactly the same thing happen to my fire engine last year.

B1 の my car は初出であるにも関わらず、自然に理解されるが、B2 の my fire engine は唐突であるという。それは舞台であるアメリカ社会では誰でも自動車を所有しているという前提知識があるが、誰でも消防自動車を所有しているという前提知識はないためである。このような場合には、"Well, I have a fire engine and..." のように明示的導入表現によって新規指示対象を談話に導入しなくてはならない。すなわち my car の理解にはまず共有知識が発動している。

次に my car は初出であるにもかかわらず定名詞句として導入されるが、この方略を可能にしているのは、話し手である I に対する定位操作が所有表現 my によってなされているためである。つまり、ここには発話状況領域に含まれる情報が利用されている。よって、このタイプの指示は、共有知識領域と発話状況領域の双方にまたがるハイブリッド型の指示であると考えることができる。

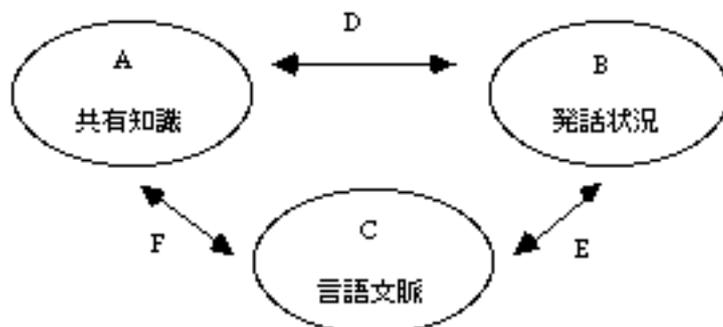
次にあげる例文を見てみよう。ここではフランス語の例を用いる。

(11) Puisque vous parlez de filles, regardez-moi *celle-ci* !

"Because you are talking about girls, look at this one (sing.fem.proximal)."

指示代名詞 *celle-ci* は女性単数形近称で、複数形の先行詞 *filles* 「女の子」から性のみを継承している。ここには先行詞 *filles* と代名詞 *celle-ci* のあいだに、言語文脈に基づく照応関係があり、この点では Paul → he のような通常の代名詞の照応と変わるところがない。しかし、この代名詞の独自の点は、*ce-XXX-ci* という指示詞としての要素によって、発話の現場に存在する対象を指さし行為などを伴ってさすことができるという点にある。すなわち、代名詞 *celle-ci* はその人称代名詞としての性格によって先行詞から意味と文法的性を受け取り、その指示代名詞としての性質によって目の前のものを新たにさすことができるのである (注 12)。したがってこのタイプの代名詞は、言語文脈領域と発話状況領域に両方にまたがるハイブリッド型の指示とみなすことができる。

これで Clark & Marshall があげた連想照応を加えて、都合 3 つのハイブリッド型の指示を区別することができる。ひとつの指示領域だけに関係する指示は 3 種類あったので、全部で 6 種類の指示があることになる。図示とそれぞれの例を以下に再掲する。



- (12) A. 共有知識領域 Columbus discovered America in 1492.
 B. 発話状況領域 I'll take this.
 C. 言語文脈領域 Augustus is a friend of mine. He is fond of fishing.
 D. (=A + B) I had exactly the same thing happen to my car.
 E. (=B + C) Puisque vous parlez de filles, regardez-moi celle-ci !
 F. (=C + A) I bought a candle yesterday, but the wick had broken off.

4. 談話モデルの埋め込み

さて、話を日本語のコソアに戻して、今までに問題にされてきた指示詞の用法が、談話モデルを援用することでどのように説明できるかを見よう。

正保 (1981)は次の例のコの使用を、先行詞「走り書きのカード」を受ける文脈指示と見なすよりは、堀口 (1978) のいう「観念指示」(注 13) に近づいており、「これはうかつに捨てられないぞ」という内言を踏まえていると分析している。

- (13) 畏友深代淳郎の走り書きのカードも出てきた。そういうものを伝統と称するならば、これはうかつには捨てられないぞと思った。(『天声人語』)

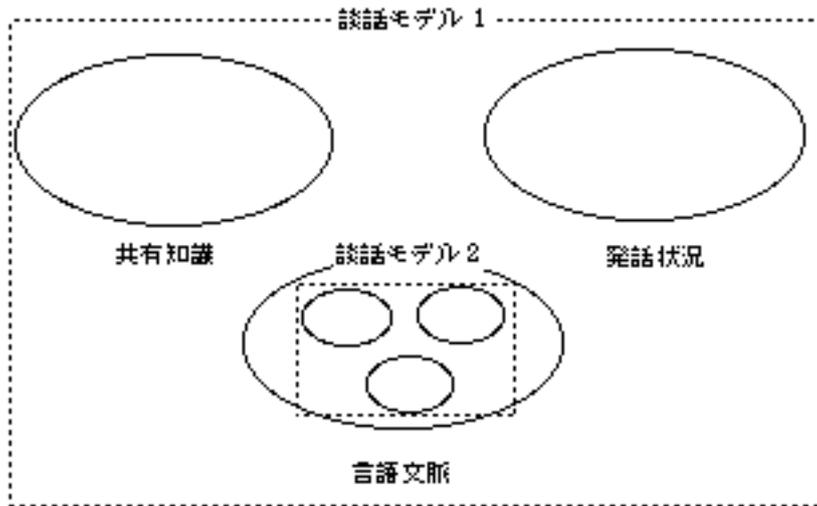
金水・田窪 (1990) は次の例を、「視点遊離のコ」と呼び、小説や体験談で語り手が現場や聞き手に影響されることなく、視点を自由に話のなかの登場人物に近づけ、登場人物の目から見て近いものをコでさすとしている。

- (14) うとうととして目が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。
この爺さんは慥かに前の駅から乗った田舎者である。(『三四郎』)

また吉本 (1992) は同じ例を「感情移入」という概念を用い、話し手(書き手)が想像上の世界の人物と自分を同一視するために発現する用法としている(注 14)。

吉本の「感情移入説」、金水・田窪の「視点遊離説」は、それぞれの例については妥当なものではあるが、(13)のような例の存在を踏まえて、より一般的な形に改めるのがよいと思われる。

上記の一連のコの用例は、談話モデルの埋め込みという概念を用いることで一般的に記述できる。われわれは、小説や物語で架空の世界について語るとき、その架空の世界の地理的場面は、想像上の発話の場として把握される。また、自分の過去について物語るとき、発話時点の「今 1・ここ 1」を離れ、思考のなかで過去の世界に移動し、その世界に新たに「今 2・ここ 2」を構築し、それを基準点として新たな空間的・時間的関係を創り出すことができる。新たに構築された「今 2・ここ 2」をパラメータとする談話モデルは、「今 1・ここ 1」の談話モデルのなかの、言語文脈領域の内部に埋め込まれたものと見なすことができる。図式的には次のようになろう。



談話の進行に従って、談話モデルの領域内に格納される情報は変化するので、もともと談話モデルはパラメータとして時間 t を有している。つまり談話モデルは時間にたいして相対的である。小説などの架空の世界を扱うには、時間 t に加えて、世界 w をパラメータとして設定すればよい。談話モデルを関数 DM で表現すると、あらゆる談話モデルは $DM(t, w)$ と定義できる。つまり談話モデルは時間と世界にたいして相対的である。このとき談話モデルは、時間 t と世界 w を領域とし、心的表象としての知識状態を値域とする写像関数である(注15)。

(13)の例をこのモデルで説明すると、談話モデル 1 は天声人語のこの文章を筆者が書いている時点 t_1 におけるモデル $DM(t_1)$ である。問題の「これはうかつには捨てられないぞと思った」のこの現れる部分が関係するのは、筆者がそう思った過去の時点 t_2 におけるモデル $DM(t_2)$ で、 $DM(t_2)$ は $DM(t_1)$ の言語文脈領域の内部に埋め込まれている。コがさしているのは、 $DM(t_2)$ の発話状況領域に存在する深代淳郎の残したカードで、筆者は時点 t_2 においてこのカードを手にとり「現場指示」的に、「これはうかつには捨てられないぞ」と考えたのである。従って、このコは $DM(t_2)$ においては現場指示であるが、それを包含する上位の $DM(t_1)$ においては文脈指示である。正保の主張するように、このコの使用は文脈指示よりは観念指示に近づいているという中間的性格は、このような談話モデルの自己埋め込みの結果生じたものである。

例(14)も同じように分析できることは明らかである。ただし、(14)では埋め込まれる談話モデルは話し手(書き手)のものではなく、物語の登場人物のものとして仮構された談話モデルであるので、(13)の自己埋め込みとはいくつかの点で異なる。一例をあげると、作者の「私」は登場人物の「私」ではないので、 $DM(t_1)$ の発話状況領域の「私」は、 $DM(t_2)$ 内の発話状況領域の「私」とはリンクされていない(注16)。

5. 共有知識は不要か？

さて、いよいよ本稿の最も重要な問題を考察する。それは談話モデルの一部をなす「共有知識領域」をめぐる問題である。この共有知識という概念は、久野(1973)の分析にす

でははっきりと用いられている。

ア系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。

ソ系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

ところが Clark & Marshall (1981) は、共有知識を想定すると解決不可能なパラドックスに陥ることを指摘した。話し手 A と聞き手 B のあいだで、ある事柄 P が知識として共有されているという状態が成立するためには、次の条件が満たされなければならないという。

(15) A and B mutually know that P.

(1) A knows that P.

(1') B knows that P.

(2) A knows that B knows that P.

(2') B knows that A knows that P.

(3) A knows that B knows that A knows that P.

(3') B knows that A knows that B knows that P.

et cetera ad infinitum.

ところがこの連鎖は無限であり、一方で指示表現は短い時間で理解されるという経験的事実と矛盾する。これが共有知識のパラドックスである。

田窪 (1989) はこの問題に対処するために、埋め込みを(3')までの3段階で止めることで無限遡及を回避する。田窪の用いた電子メールによる連絡の例を用いると、たとえば明日の会合の時間の変更を A が B に通知するとする。まず第一のメールで A は B に変更を知らせる。変更通知を受け取ったという B から A への返信メールで、A は B が知識状態を更新したことを知る。A は B に返信メールを受け取ったという内容のメールを再び送信することで、B の知識状態の変更が A に了解されたという確認を行なう。これで(3')までが保証されたことになる。

吉本 (1992) (注 17) も 4 段階以上埋め込みの必要な例が見つからないとして、3 段階までのモデル化を提案している。一方、金水・田窪 (1992) では、話し手が知っている、聞き手も知っている、ただし聞き手が「話し手が知っている」ことを知っているかどうかは必ずしも問題にはならないとして、事実上 A knows that P. , A knows that B knows that P. までの 2 段階の「擬似的」な共有知識で十分であると結論している。

ところが、田窪・金水 (1996) は再びこの問題を論じ、一転して共有知識を想定すると無限遡及に陥るという、Clark & Marshall のパラドックスを根拠として、共有知識という概念を言語形式の使用法の記述に含むことを否定しているのである。

それに代わって田窪・金水 (1996)が提案するのが、複数の心的領域モデルを用いた談話管理モデルである。この提案では黒田 (1979)の示唆を発展させて、「直接経験領域」(D-領域)と「間接経験領域」(I-領域)が設定されている。

D-領域 (長期記憶とリンクされる)

長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。直接指示が可能。

I-領域 (一時的作業領域とリンクされる)

まだ検証されていない情報 (推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報) とリンクされる。記述などにより間接的に指示される。

そしてソ系指示詞はI-領域を、ア系指示詞はD-領域を検索領域とすると規定することで、次の黒田の例を説明する (注 18)。

- (16) 今日神田で火事があったよ。{?あの /*その} 火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。

この例が問題になるのは、話し手だけが火事を見聞きしていて、聞き手が知らない場合でも、アを用いることができるからである。これは明らかに久野 (1973)のアは「指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」という制約に違反している。

田窪・金水の説明はこうである。例(16)で話し手は自分が見聞きした (つまり直接経験した) 火事の持つ属性をもとにして、何人も死んだという想定を導きだしている。つまりD-領域にアクセスしているので、アが用いられる。一方、(17)のBのソは談話中でのみ提示された属性、つまりI-領域に帰属する情報にアクセスしているので、ソが用いられている。またAのソは、Aも新聞などで読んで火事については間接的に知っているという状態か、たとえ直接に見聞きしていたとしても、自分の直接経験した情報ではなく、報道などに基づく客観的な事実の報告で、いずれもI-領域にかかわるものだけということになる。

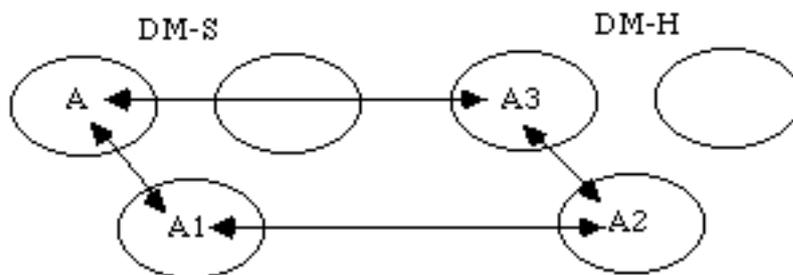
- (17) A: 先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました。
B: その火事のことには新聞で読みました。

本稿では田窪・金水のこの分析の不備を指摘し、共有知識という概念は必要であること、共有知識を想定しても無限遡及には必ずしも陥らないこと、また彼らの提唱する複数の心的領域によるモデルは、本稿で述べた談話モデルの一部として吸収できることを主張する。まず次の例を見よう。

- (18) A: 昨日山田さんに初めて会いました。あの人ずいぶん変わった人ですね。
B: ええ、あの人には変人ですよ。

この例ではAもBもアを用いている。Aは山田に昨日会っており、Bは旧知の間柄と見受けられるので、AもBも山田について直接経験を持っている。田窪・金水の分析では、両者にとって山田はD-領域に帰属する情報なので、アが用いられるということになる。しかしこの考え方だと、AのD-領域にある山田とBのD-領域にある山田の同一性はどのように保証されるのだろうか。Aが山田に会うという直接経験を持ち、BはBで山田について直接経験を持っているということだけでは、AのD-領域に登録された山田とBのD-領域の山田との同一性は確保されない。両者のそれぞれのD-領域内の要素を結ぶリンクは、ここでは意図的に外されているからである。

すでに例(4)について示したように、アの用いられる条件は次の談話モデル状態である。



ここでは話し手の共有知識領域のAと聞き手の共有知識領域のA3とがリンクされているという点が重要である。このリンクによって、話し手の山田と聞き手の山田の同一性が確保される。このリンクは、ふたりの共通体験（たとえば一緒に行った沖縄旅行）によって保証されることもある。このリンクは、指示対象について互いに確認しあう言語行為によって確立されることもある。このような基盤があって初めて、アの指示対象の同一性が保証されるのである。田窪・金水は(18)のアの分析に際して、このリンクに言及していないが、実は暗黙のうちにこのリンクを用いていると考えざるを得ないのである。

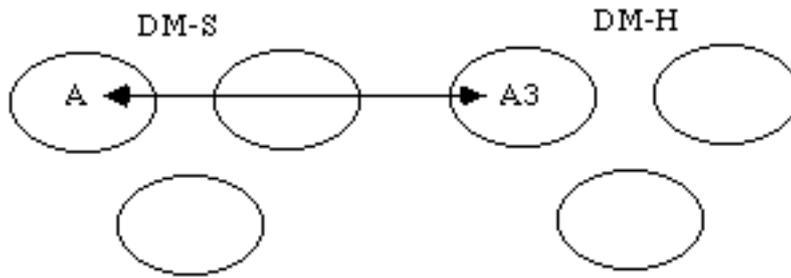
共有知識を想定しなければ、次のアの用法を説明できない。

(19) [会社の廊下で部長が部下に向かっていきなり]

A: 君、あの件、どうなった?

B: はい、あの件でしたら、うまく行きました。

前日の深夜までふたりで重要な案件に取り組んでいたというように、高度に語用論的知識を共有している状態ならば、(19)の発話は可能である。これを表現する談話モデルは次のようになる。

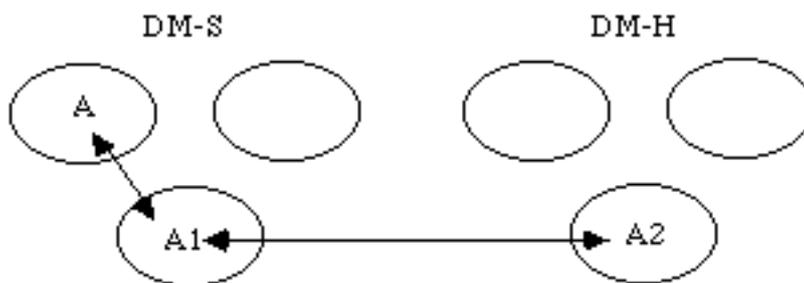


(19)で指示対象は言語的に表現されていないので、言語文脈領域にその存在を持たない。アは話し手の部長と、聞き手の部下のそれぞれの共有記憶領域に登録された対象 A と A3 を直接に指示しているのであり、その同一性のリンクは前夜の仕事という共通体験によって保証されている。

(20) ほら、去年いっしょに沖縄に行っただろ。あの青い海、あの珊瑚礁 ...

田窪・金水のモデルを字義どおり解釈すると、指示対象が自分の D-領域に属しているならば、話し手は自由にアを用いることができるという結論に陥ってしまう。しかし、これは事実と反する。(20)のようなアが使えるためには、指示対象が話し手の D-領域にあるだけでなく、聞き手の D-領域にもあり、話し手がそのことを知っている (つまり共有知識がある) という前提が必要である。

では談話モデルによれば、黒田の(16)の例はどのように説明できるだろうか。これを表現する図は次のようなものになる。



話し手のモデル DM-S では、「神田の火事」は共有知識領域 (のなかの話し手だけが持つエピソード記憶領域) に A として、また(16)の発話によって言語文脈領域に A1 として存在する。聞き手は A1 の対応物である A2 を自分の言語文脈領域に持つが、A に対応するものは自分の共有記憶領域には持っていない。このような状態で、話し手は神田の火事について語るとき、A と A1 のどちらも指示対象とすることができる。「昨日神田で火事があった、その火事で学生が二人死んだんだ」という場合、ソがさしているのは A1 である。これは聞き手の DM-H も対応物を持つ。一方、(16)で話し手のアがさしているのは A である。これは聞き手の DM-H に対応物を持たない。このように共有知識の制約に反してアを用いる

には、次の条件が必要である。このうち(a) は黒田も田窪・金水も指摘している。ここでは(b) も必要だと考える。

(a) 指示対象についての概念的・間接的知識ではなく、体験などに基づく直接的知識が必要な内容を述べている

(b) 聞き手の談話モデルの状態の査定をいったん停止、または意図的にカッコに入れている

話し手は(b)の操作を行なうことで、(16)のような一方的断定というニュアンスや、(21)の聞き手を置いてきぼりにして回想にふけっているというニュアンスが生じる。(22)のアの使用も同じように理解できる。

(21) A: B さんが芸能界に入ったのはどんな時代でしたか？

B: あの頃は浅草オペラの全盛時代でしてね。

(22) ぼくは大阪にいるとき山田という先生に習ったんだが、君もあの先生につくといいよ。

黒田の例(16)でも上の(21) (22)でも、アがさしているのは話し手の共有知識領域 (のなかの個人的エピソード記憶) に存在する対象である。このように、アには文脈指示用法はなく、常に共有知識領域にあるものをさすのである。また、田窪・金水の複数の心的モデルの D-領域は、本稿のモデルの共有知識領域と発話状況領域に対応し、I-領域は言語文脈領域に対応することも、今までの議論から理解できるだろう。

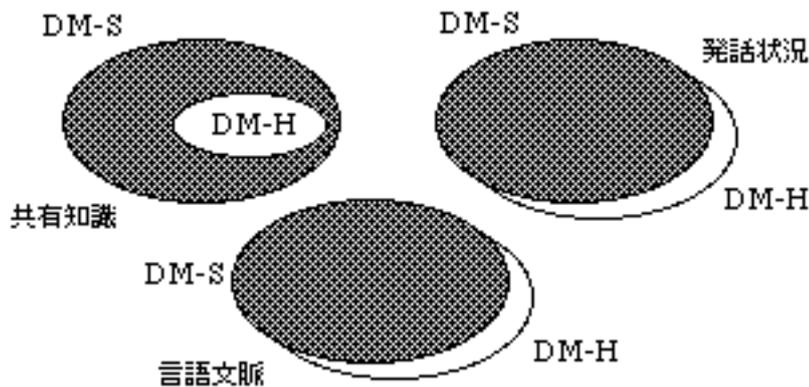
黒田の例はこのように説明できるとして、では共有知識のパラドックスはどのようにして回避できだろうか。まず(15)にあげた Clark & Marshall の共有知識成立の条件は「神の視点」からの条件であり、その一部は現実の談話には不要である(注 19)。われわれは現実には話し手の側からの一方的な想定に基づいて談話を構築するのである。よって田窪(1989)がすでに正しく指摘しているように、話し手の視点のみに立つことによって Clark & Marshall の条件の (1') (2') (3')は削除できる。

実は現実の談話では条件(3)すら必要ではない。話し手 A の側から見て必要な条件は次のふたつだけである。b.で knows を supposes と変えてあることに注意してほしい。

(23) a. A knows that P.

b. A supposes that B knows that P.

これだけの条件で十分な理由は、聞き手の談話モデル DM-H は、話し手の DM-S に埋め込まれているからである。今までは図示の便宜のため、DM-S と DM-H を左右別々に描画し、そのあいだでリンクを張っていたが、正しい図示は次のようなものになる。



上の図で黒く塗りつぶしてあるのが話し手のモデル DM-S、白い部分が聞き手の DM-H である。発話状況領域と言語文脈領域は、話し手と聞き手に共通の与件なので、DM-S と DM-H は重なっている (注 20)。少しずらして描画しているのは、完全に重ねて描くと見えなくなるという技術的理由による。上図で重要なのは、DM-H の共有知識領域が、DM-S のその内部に埋め込まれているという点である。つまり、聞き手の共有知識は、話し手の共有知識の部分集合である。

話し手の視点から見れば、「聞き手の共有知識」とは、実は実体を持たない仮構物である。われわれは他人の頭のなかを覗くことはできない。聞き手の共有知識とは、話し手の私が「相手はこれくらいは知っているだろう」と想定する内容にすぎない。この想定 of 根拠は、確実な場合もあれば (たとえばいっしょに沖縄に旅行した)、単なる推測の域を出ないこともある (たとえば日本人の成人なら知っていて当然の事柄である) (注 21)。

ではなぜここまで共有知識のパラドックスが問題にされるのだろうか。それは談話処理にあたって、「計算主義的」で「決定論的」言語観が暗に想定されているからである。聞き手の知識の隅々まで計算しようとするれば、必然的にパラドックスに陥らざるをえない。厳密な決定論は神の視点からの全知を要求するからである。ここでは話し手と聞き手のあいだの談話理解について、もっと「非決定論的」で「確率論的」な言語観を提案したい (注 22)。

もうひとつ重要な点は、現実に行なわれよう談話は、言い淀み、中断、前言の訂正、構文の中途変更などの、談話管理的操作を含むものだという点である。相手の共有知識についての査定がまちがっていけば、指示詞はうまく理解されないことがあるが、このような齟齬が生じたときには、すみやかに修復過程 *repair* が実行される。このような修復過程までも含んだ全体が談話なのである。談話を話し手と聞き手の相互行為 *interaction* と定義する所以である。例をあげよう。

(24) one had a uh ... I don't know what you call them, but it's a paddle, and a ball ... is attached to the paddle, and you know you bounce it ? (Du Bois 1980)

(25) Someone came along before the kid on the bicycle but I don't remember who it was ... Then a kid came along on a bicycle. (Ibid.)

(24)では先行詞のない代名詞 **them** が用いられている。話し手は指示対象の名前を思い出せないので、日本語にすれば「あれは何というんだっけ、ラケットにボールが結びつけられていて...」と、アを用いるところである。代名詞 **them** は話し手の共有知識領域に登録されている（しかし名称を思い出せない）指示対象を潜在的先行詞としている（注 23）。(25)では新規指示対象導入の原則である不定名詞句ではなく、**the kid / the bicycle** と定名詞句が用いられている。定名詞句の使用は聞き手の談話モデルにも対応する指示対象がすでに存在することを前提とするので、この **the kid** は明らかに聞き手の談話モデルの査定に違反している。そこで話し手は次に **a kid / a bicycle** と不定名詞句を用いて、改めて指示対象を談話に導入して、自分のした違反を修復している。聞き手の共有知識にたいする配慮がなければ、このような修復は行なわれなければならないはずである。

このように現実の談話は、聞き手の談話モデル状態を確率論的に査定しながら、自分の談話モデルとの不断の調整過程を行ないながら進行するものである。聞き手の共有知識の予想の調整そのものも談話の一部なのであり、話し手と聞き手の共有知識の完全な一致を談話成立の条件とする必要はないのである。

6. おわりに

本稿では、共有知識領域、発話状況領域、言語文脈領域の3つの指示領域を持つ談話モデルを設定することで、さまざまな指示表現を6つの型に分類できること、また談話モデルの埋め込みを仮定することで、日本語の指示詞の文脈的用法のいくつかを合理的に説明できることを示した。本稿では日本語のコソアを中心に扱ったが、このモデルは一般的なものであり、指示詞以外の指示表現や、日本語以外の言語の指示表現も、このモデルを用いることで説明が可能である。

【註】

(1) 談話モデルの概要については、東郷 (2000) ですでに示してあるが、本稿で提案するのは、重要な変更を含んでいる。主な点は、共有知識領域を百科事典的知識領域とエピソード記憶領域に下位区分したこと、領域に登録された指示対象同士を結合する知識リンクを設定したこと、談話モデルのなかへの談話モデルの埋め込み（自己埋め込み）を認めたことである。

(2) 談話モデルの構成については、Fauconnier (1985) のメンタル・スペース理論、金水・田窪 (1990) の談話管理理論、坂原 (1996) の談話処理モデルから様々な知見を取り入れている。したがって、本稿で談話モデルと呼んでいるものは、メンタル・スペースの一変形と見なすこともできるが、先行するモデルとは様々な点でちがいがあ

(3) 指示詞の分析にこのような階層的記憶モデルを援用する試みには、吉本 (1992) と風斗 (1985)がある。

(4) 言語文脈領域もいくつかの下位領域に分割されると想定されるが、本稿の論旨とは直接関係しないので、ここでは論じない。坂原 (1996) は「言語データ記憶」「言語理解記憶」「長期談話記憶」の3つの下位区分を提案しているが、その性質と働きは不明である。

これが発話の物理的現場ではなく、それについての心的表象であるという点については、高橋 (1956)の「場」と「場面」の区別を参照。ここでいう発話状況領域とは、高橋の言う「場」に相当する。

(5) これが発話の物理的現場ではなく、それについての心的表象であるという点については、高橋 (1956)の「場」と「場面」の区別を参照。ここでいう発話状況領域とは、高橋の言う「場」に相当する。

(13) 堀口のいう「観念指示」とは、発話の場や先行文脈に指示対象を持たず、話し手の観念のみに存在するものをさす用法を言う。たとえば明示的身振りなしの「これは面白い」のような独白の内言における指示であり、聞き手は存在しないので、アとコが用いられる。また、共通の了解に基づく「あれを持って来い」のアも観念指示とされている。

(14) 吉本 (1992) は Yoshimoto(1986)の翻訳であり、初出年代から言えば、吉本の感情移入説は、金水・田窪 (1990)の視点移動による分析よりも先に提唱されている。

(15) 時間 t を世界 w に還元する可能性もある。つまり、過去の世界や未来の世界を、小説などの想像上の世界と同じように、別の世界 w と見なす方法である。多くの言語で観察される時制表現とモダリティーを表す法の表現の類似性はこの可能性を強く示唆するものだが、本稿ではこれ以上追求しない。

(16) にもかかわらず、Flaubert の「ボヴァリー夫人は私だ」という告白に代表されるように、登場人物がしばしば作者の分身であるのは、DM(t_2) の「私」に DM (t_1) の「私」が投影されるからである。

(17) 注の(14)にも述べたように、吉本 (1992) のオリジナルは Yoshimoto (1986)なので、この提案は田窪 (1989)よりも早い。

(18) 黒田自身はこの例について「少し座りが悪いかもしれない」と述べるに留まっていて、例中のアノに ? を付したのは田窪・金水である。

(19) ここで「神の視点」と現実の人間の視点のちがいを理解するために、次のような思考実験を試みよう。旧知の間柄の A と B が交差点で出会うという状況を想定する。その交差点は高い塀で囲まれていて、道路を歩く人には別の方角から来る人は見えない。A は交差点に北から、B は東から近づく。ふたりは交差点でばったり出会い驚く。A と B の視点からは、この出会いはまったくの偶然に見える。しかし、この交差点を高いビルから見下ろしている人を想定しよう。この視点から見れば、A と B はともに交差点の方向に歩いているのだから、ふたりが出会うのは偶然ではなく、逆に必然である。この視点は神の視点である。現実の談話を構築する人間は、このような神の視点を取ることはできず、塀に囲まれた道を歩いている人の視点しか取りえない。

(20) 指示詞の現場指示的用法が問題になるときは、発話状況領域は話し手側からの指示領域の分割と、聞き手側からのそれを含むことになるので、このようには重ならない。また言語文脈領域も、ここでは便宜上 DM-S と DM-H とで同じと設定してあるが、話し手によ

る話線の分割や情報提示の方略が問題になるときは、異なる場合もある。本稿ではこれらの問題はこれ以上追求しない。

(21) Clark & Marshall も共有知識のパラドックスを検討したのち、最終的には共有知識の存在を推測する根拠 (Grounds)が確認できればよいとして、このパラドックスを解消できるとしている。

(22) Cornish (1999)も照応過程における先行詞の決定には、決定論的ではなく確率論的言語観の方が、現実に観察される照応表現の分析には有効であることを示している。

(23) ここでは them が後続文脈の a paddle と a ball をさす後方照応であるという見方はとらない。これは話し手が them を用いる時点で (あるいはそれ以前から)、すでに話し手の談話モデルには them の指示対象が存在していると考えからである。後方照応という分析は、聞き手あるいは解釈者の視点からの見方にすぎない。

【参考文献】

金水 敏, 田窪行則 (1990): 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」, 『認知科学の発展』, 講談社.

金水 敏, 田窪行則 (1992): 「日本語指示詞研究史からへ」, 田窪行則・金水 敏 (編) 『指示詞』, ひつじ書房.

久野 障 (1973): 『日本文法研究』, 大修館書店.

黒田成幸 (1979): 「(コ)・ソ・アについて」, 『英語と日本語と - 林栄一教授還暦記念論文集』, くろしお出版.

春木仁孝 (1991): 「指示対象の性格から見た日本語の指示詞 - アノを中心に」, 『言語文化研究』 (大阪大学言語文化部) 17.

風斗博之 (1985): 「定不定表現と記憶階層モデル」, 日本言語学会 91 回大会.

堀口和吉 (1978): 「指示語「コ・ソ・ア」考」, 『論集日本文学・日本語』, 角川書店.

三上 章 (1970): 「コソアド抄」, 『文法小論集』, くろしお出版.

坂原 茂 (1996): 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」, 『認知科学』 3-3.

佐久間鼎 (1936): 『現代日本語の表現と語法』, 厚生閣.

正保 勇 (1981): 「「コソア」の体系」, 『日本語の指示詞』, 国立国語研究所.

高橋太郎 (1956): 「「場面」と「場」」, 『国語国文』 (京都大学文学部) 25-9.

田窪行則 (1989): 「名詞句のモダリティー」, 仁田義雄・益岡隆志(編) 『日本語のモダリティー』, くろしお出版.

田窪行則, 金水 敏 (1996): 「複数の心的領域による談話管理」, 『認知科学』 3-3.

東郷雄二 (2000): 「談話モデルと指示 - 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」, 『総合人間学部紀要』 (京都大学) 7.

吉本 啓 (1992): 「日本語の指示詞コソアの体系」, 金水敏・田窪行則 (編) 『指示詞』, ひつじ書房.

Clark, H. H. & C. R. Marshall (1981): "Definite reference and mutual knowledge", A. Joshi, B. L. Webber, I. Sag (eds.) *Elements of Discourse Understanding*, Cambridge UP.

- Cornish, F. (1999) : *Anaphora, Discourse, and Understanding*, Clarendon Press.
- Du Bois, J. W. (1980) : "Beyond definiteness : the trace of identity in discourse", W. L. Chafe (ed.)
The Pear Stories : Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production, Ablex.
- Fauconnier, G. (1985) : *Mental Spaces*, MIT Press.
- Givon T. (1995) : *Functionalism and Grammar*, J. Benjamins.
- Imoto, H. (1997) : "Les pronoms démonstratifs celui-ci et celui-la", *Etudes de langue et littérature françaises* (日本フランス語フランス文学会) 70.
- Kleiber, G. (1991) : "Celui-ci / celui-la ou comment montrer du nouveau avec du déjà connu",
Revue québécoise de linguistique 21-1.
- Prince, E. F. (1978) : "On the function of existential presupposition in discourse", *CLS* 14.
- Yoshimoto, K. (1986) : "On demonstratives KO/SO/A in Japanese", 『言語研究』 (日本言語学会) 90.